

## 介護文学としてのカフカ「変身」

— 患者と家族は離れた方が良い時もある —

笠間市立病院 石塚恒夫

5月にNHKテレビ・100分de名著で、「変身」が取り上げられました。「ある朝、グレー・ゴルザムザは、落ち着かない夢から目を覚ますと、自分がベッドのなかで巨大な虫に変わっているのに気が付いた」という文章で始まる、1915年発表の短編小説です（著者はフランツ・カフカ）。番組で興味深かったのは、家族介護の問題を描いているという解釈があることです。

これはグレー・ゴルザムザと、ついに妹にも否認されたことで、主人公は絶望して亡くなるのです。

変身した主人公は、家族の言葉は理解できるのに話すことができません。当初は生計を支える重圧からの解放感を満喫しますが、次第にこのままでいいのかと焦ります。父親は一貫して虫の姿となった息子を排除する姿勢を示し、リングゴを投げつけて致命傷を負わせます。母親は虫を息子と認められず、姿をみるといつも気絶します。介護を一手に引き受けた妹は役割を与えられ、生き生きとしますが、外で働くようになる介護をわざわざにします。主人公が妹の弾くバイオリンを近くで聴こうと部屋を出てくると、妹は人前に姿をみせたと非難します。「あ

小説の中で「害虫」と日本語に訳される「ウンゲツツィーファー」は、ドイツ語の「神のお供えに使えない」という言葉から派生した言葉です。また、カフカは「表紙に虫とわかる絵を使わないで欲しい」と依頼しており、「ウンゲツツィーファー」は引きこもりや障がいの比喻として書いていたのかもしれない。

家族は無条件で承認し合うというのが理想ですが、そうできないのも人間です。その場の感情に溺れず、自分の行動を客観視することは難しいのです。今までの患者を知るのも家族なのに、患者の一見問題に見える行動の意味を推測できなくなるのです。家族が「まったく食べないので入院させてください」と興奮して訴える場合、入院した途端に食べられることも多いのです。入院には家族関係を修復するシェルターの役割もあるのだと、最近感じています。

## 笠間の歴史探訪7

### 延喜式内社の稲田神社

国道五〇号を笠間市街より西へ進み稲田地区に入ると、歩道橋手前の右手に稲田神社の大鳥居が見えてきます。大鳥居を潜り、参道奥の石段を登ると社殿が現れます。明治六年、村内の五社を合祀して現在の社名に変わり郷社に指定され、同十六年に県社に昇格しました。元の神社名は稲田姫神社で、「古事記」の「八岐の大蛇」の話で知られる奇稲田姫を祭神として祀った神社です。その歴史を見てみましょう。

国道五〇号沿いの、西は鬼怒川東岸から東は旧笠間市域の地は、古くには新治郡と呼ばれました。平安時代の延長五年（九二七）醍醐天皇の世に、当時の法律を補った「延喜式」が完成しました。その中の全国の主な神社を登録した「神名帳」という記録に、稲田姫神社が「名神大」とあります。名神大とは「国になにか事変が起こった時、それが鎮まることを祈願する儀式を行う神社」のことで、由緒のある大社をさします。

鎌倉時代、稲田姫神社は十七町歩の土地（神田）を所有し、同社の一の鳥居が本戸地区の南指原地区にありました。その名残が神田・鳥居松の小字名で現存しています。

す。笠間の初代城主笠間（藤原）時朝は、六代将軍宗尊親王の歌道師範であった藤原光俊や本家筋の宇都宮家の人々などを笠間へ招き、同神社で歌会を催しています。

戦国時代になると、同神社は戦乱にまきこまれ、一時衰えました。

江戸時代には、笠間藩主や水戸藩第二代藩主徳川光圀の手厚い保護をうけました。光圀が江戸へ上る途中に同社を参詣した際、由緒ある同社の余りの荒れ様に驚き、再興に力を貸しました。神官田村善大夫を江戸へ同行して教育し、四方の神々を意味し、儀式に用いる四本の旗「四神旗」（茨城県指定文化財）等を奉納しました。また、笠間藩主の井上正利は土地を寄進、牧野氏は幕末に類焼した同社の再建時に金三〇両を援助しました。このような歴史のある神社です。

（市史研究員 矢口 圭二）



稲田神社の社殿